

『感傷ストーブ』 秀歌抄出三十首

※選考委員による抄出

将来は見ない聞かない言わないでポップコーンと帰る夕暮れ

未使用の婚姻届を手で丸め剛速球で隅田川へ春

風呂の湯に溺れる蜘蛛が乳に乗る二度と他人が触らない乳

派遣先からペン支給されインクより速く無くなる私の色素

一〇〇〇分の一秒間に現れる良い状態の私。の自撮り

男の名刺をシュレッダーする一昨日の送別会のビンゴカードも

「三カ月、更新しましょう」派遣元の声聴く春の陽射しのない部屋

〇脚の膝の間をすり抜ける夜風 私の体温奪う

おい、少年。面白いのか母親の膝上で読む『週刊女性』

認知症の祖母いて認知症のまま何も言わずに息を引き取る

本棚に本差しこむように置いたのだ祖母の骨壺共同墓地に

「魚なら私は雑魚だよ」発言をぴかぴか照らすネオンテトラは

ゲリラ豪雨に打たれて走る全身で君の歌載る雑誌守って

生きてゆく自主練として繰り返し夢で尿意を我慢している

背後から急かす舌打ちの音がしてエスカレーターいま駆け上がる

坂の下参拝の列に並んでるウディ・アレンの戯曲とともに

浮気とか関係の無いわたくしに神は「待ち人来らず」とだけ

ピンク色の婚姻届絶対に破れないという怖さを持って

てのひらを使わずドアを開けていく。今宵、わたしはハンカチがない。

餌入れる容器に子子住んでいるここにはかつて猛犬がいた

戦争を生き抜き祖父は氷水飲んで「女の知事は嫌だ」と

棒に振る人生もなくなつただ君がいる恐ろしさ 恋だけがある

爪楊枝になりたい 刹那君の手に包まれるのだ爪楊枝なら

「雑兵のように寝てるんですけど」と言えばさらさら何か書く医師

胃や腸や肺や心臓、卵巣と内側ばかり褒められる日だ

「つまらない女だ」君と私とで笑う私のつまらなさなど

おはじきをたくさんくれる祖母のようお釣りを返す蕎麦の券売機

あつ こんな はいらない です 心閉ざす速度で閉まる溶解ボックス

忙しないものですね死は自転車を立ち漕ぎでゆく喪服の人よ

株分けを分骨と呼ぶ妹が次々分けるガーベラの苗